

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'87秋

= 第8回大学院共同セミナー =

●現代科学の自然観

= 第10回大学合同セミナー =

●日本的経営

— その過去・現在・未来 —

●故山内恭彦先生追悼記念会



Plain living and high thinking

No.108

現代科学の自然観

東京大学先端科学技術研究センター教授 竹内 啓

デカルト・ニュートンの世界像か、
量子論的世界像か

②

はじめに、専門的な科学者以外の人たちが、常識としてごく普通に考えている自然科学の世界観について考えてみましょう。それは、一言で言えば、デカルトやニュートンによって確立された近代の自然科学的世界観と書いてよいと思います。それは、实在論と因果論の二つの特徴を持っています。实在論とは、人間が認識しようとしまいが、自然や宇宙が絶対的に存在していると考える一方であり、因果論は、自然の運行や変化が原因と結果の関係で必然性をもって決まっているという考え方です。

因果論は機械的因果論とも呼ばれますが、機械的ということには「Aであれば、Bである」というように、非常に形式的なルールによって因果関係が決まるということです。そこには不確定性や不確実性が全くありません。重要なことは、この因果法則がいつでも、どこでも成り立つということです。ここでは、自然は完全に均一であると考えられているわけですが、自然は時間的にも空間的にも均一であるとする見方の論理的帰結として、無限性という概念が出てきます。もし、宇宙に始めと終わりがあり、空間にも端があるとすれば、時間や空間の均一性が崩れ、法則が普遍的に成立しなくなってしまうからです。また、因果論では、物事の本質の違いは、すべて数量に還元できると考えられています。ガリレオは、色など感覚に訴えるものはあてにならない、物事の本当の性質は重さや長さなどの数量的性質のものだけだと言っています。

一方、实在論は、人間の認識とは無関係に宇宙が存在しているとするわけですから、人間の認識と対象の世界との間には決定的な差があると考えられます。これが、いわゆるデカルトの二元論です。ものの世界と心の世界があつて、ものの世界は完全に因果論に支配され、それを認識するのが心の世界であり、両者は完全に独立し、互いに干渉しないと考

えるのです。因果法則に支配された客観的世界での科学の役割は、現実を模写することであり、科学の発展とは写生がだんだんとうまくなることを意味しています。

以上が、伝統的、常識的な自然科学の世界像ですが、二〇世紀になると変化が起こりました。相対論的・量子論的世界像の登場です。この新しい世界像では、实在論や因果論的決定論は確率理論に置き換えられます。「Aが起これば、Bが起これる」のは必然的な現象ではなくなり、その確率が大きくなったり、小さくなったりするわけです。この世界観では、均一性や普遍性もあてにならなくなり、宇宙が有限か無限かもわかりません。宇宙には、起源があり、何百億年後には消滅してしまうかも知れないのです。先程の明確な二元論的区別も怪しくなり、観測する主体と客体との絶対的な区別が成り立たなくなりました。古典物理学の世界では、観測する人間は観測される対象とは全く別の論理に従うとされ、原理的にはいくらでも対象を正確に観測し、検証できたのですが、ハイゼンベルクの不確定性原理以来、それも不可能になってしまいました。観測自体が、対象を変えてしまうこと

が起これることがわかったからです。

ところで、われわれの普通の実生活では、自然科学的な研究も含めて、ほとんどの場合古典的な自然科学の世界像で用が足りています。私の専門の統計学では、確率論をよく使いますが、それは便宜的な手段で、物質の世界が完全に因果関係に従っていると考えても少しも困りません。それでは、古典的な自然観ではたしていいのかわいのか。それで済んでいるのは、言わば迷信なのでしょう。自然そのものはデカルト・ニュートンの存在であり、それを非常に詳しく研究してゆくうちに人間の知力では捉え切れなくなつて、人間の認識形式の方が、量子論のような奇妙なものに変わらざるをえないようになったとも考えられます。アインシュタインも「神はサイコロを振るはずがない」と言つて、確率論的世界像に最後まで断固反対したのは有名な話です。彼は、量子力学的理論は、記述のための理論的枠組を作る一つの道具にすぎず、本質は古典的自然観でよいと考えていたようです。

生命と心の世界

— 機械的因果論の勝利? —

さて、少し視点を變えて、今までの古典的な物理学の世界像の中にもうまくあてはまらないのではないかと思われていた、生命と心の問題を取り上げてみたいと思います。面白いことには、生命や心に関しては、皮肉にも伝統的な機械論がどんどん有力になってきています。DNAが発見されて発展した分子生物学は、非常に古典的な因果論の世界です。人



間の遺伝法則は、全部古典的な物理学原理で証明できるというわけです。最近の生命科学では、量子論的不確定性や主観客観世界の不分一性は問題になりません。心に関しても、最近の脳生理学の発展によって、人間の精神現象や心理現象の多くが、物理学的・化学的な現象として説明できることがかなりわかってきたのです。

もちろん、それでも問題が残ることは言うまでもありません。例えば、偶然によって、生命の発生、生成、進化が起こったという議論がありますが、五〇億年ぐらいの短い時間ではたして人間という生物ができるのか疑問です。また、心のいろいろな現象に関しても、因果論的な物理学原理だけでは捉えられない何かが残ると考えられます。例えば、お腹がすくと空腹を感じる神経が興奮します。これは外から観測できる現象ですが、それと「お腹がすいた」という意識そのものがはたして同じものかどうか。生命にしても、本当にDNAそのものが生命なのか。生命には個性があり、それはDNAには解消できないのではないかという気がするわけです。

新しい自然のイメージ

以上の話を図式的に整理してみると、古典的な自然科学的世界観では、自然としての確固たる大地があり、その上に木がはえたり、人間や動物がいたり、無機物の家があったりする。空には、上昇気流に支えられ雲が浮んでいて、それが心の世界を表わしています。ところが、最近では、すっかりしていると思われていた大地が怪しくなり、それが、言わば

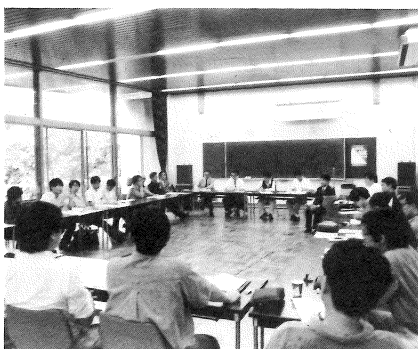
水のようになってしまうました。われわれは、水面で船に乗って浮んでいる。水面下は量子力学の世界で、水の上に古典的物理学の世界があり、水面からの水蒸気で心や生命としての雲が作られている。水中に潜ると、世界が水の上とは全く違ったように見えます。問題は、人間が水中では生きてゆけないことです。物理学者が、水面下の世界の物事について、経験的検証を行うためには、それを必ず水の上の世界にまで持ち込まなくてはならないのです。ここに、経験的検証が量子力学の世界の中でどこまで可能かという原理的な問題があるわけです。また、これが、量子力学の分野で、経験的検証のない純粹に数学的に構成された理論がたくさん作られている理由です。それは、一種の数学的プラトン主義、あるいはピタゴラス主義であり、現在の物理学理論には数学的に美しい理論が本場だとする傾向があるようです。

ここで、もう一つ指摘しておきたいことは、科学とは、その時々々の流行であって、それぞれのルールに従って、互いに言語ゲームをやっているだけであるという無責任な科学論がはやってきていることです。例えば、トーマス・クーンのパラダイム論は、大変辛辣的でもありますが、パラダイムが変わるということでも何でもごまかしてしまう悪い面もあると思うのです。古典力学と近代科学とはパラダイムが違うのだから、どちらが正しいとは言えないと考える相対主義です。しかし、人間が自然に対する理解をだんだんと進めてゆくための手段として自然科学の発展があるはずであり、パラダイム変換などと言って、時

の流行によって理論が変わるといような無責任な考え方には、私は反対です。私は、すべて因果論を信じているわけではありませんが、宇宙が実在していて、そこに真の法則性があった、それを何らかの形で人間が認識してゆくの科学であると考えています。

水の上の世界は古典的世界観で間に合っていますが、海には波もあれば海流もあります。あまり安心してしていると、われわれの乗っている船が沈んだり、どこかへ流されてしまうかも知れません。現実の世界は必ずしも決定論的な世界ではありませんが、やはりきちんとした方向づけをうるためには、海の動きも知らなければなりません。社会科学などわれわれの日常経験に近いレベルの学問における正確な認識を求める上でも、自然についての新しいイメージが必要とされています。その意味でも、現代科学の自然観を知ることには大きな意義がある、と私は思います。

(文責・編集者)



演習風景 (大学セミナー館)

第8回 大学院共同 セミナー

故山内恭彦先生追悼記念 Ⅱ 主題Ⅱ 現代科学の自然観

期 日
'87.7.3 ~ 5

▼主題に触れて

東京大学先端科学技術研究センター
教授 竹内 啓氏

2)、お茶の水女子・京都・慶応義塾・千葉・東京農業・東京理科・東海・立教(各1)、その他(5)、以上12校

▼追悼記念講演

素粒子物理学の現状と将来

東京大学理学部教授 宮沢弘成氏

▼講義・演習指導

I 物理学は世界像をどう変えたか
学習院大学理学部教授 江沢 洋氏

II 現代生物学からみる生命
自治医科大学教授 長野 敬氏

二〇世紀物理学の発展は、機械的因果論によって特徴づけられる近代科学の自然観を根本的に覆したといわれている。近代科学の自然観は、物理学のみならずすべての自然科学の基礎となり、さらには社会科学や社会思想にも大きな影響

なご尽力を下された竹内啓、江沢洋、尾本恵市の三氏と、追悼セミナーの主旨に賛同してご指導下さった宮沢弘成、長野敬、小尾信彌、辻哲夫、吉田夏彦の五氏に改めて感謝の意を表したい。

現代物理学は原子や素粒子の世界を探究するうちに、ニュートンの世界観とは根本的に異なる現実を目のあたりにすることになった。放射性の α 粒子を原子めがけて放つことによって、パラドックスにみちた確率論的な世界を発見したといわれている。

江沢氏は電子が一つの直線にそって運動していく映像によって、その動きには偶然的でありながらも結果として波模様を形作るという不思議なミクロの世界を視覚的に示された。量子力学の世界での微視的対象は、古典物理学の意味での因果律が成り立たない確率的な現象になっている。また、「波動関数」にみられるように、その理論的概念が観測できる物理量を表わしていないという。

現代生物学の変化は、物理学とは異なるものであった。なぜなら、生物学では機械論的自然観が覆ったのではなく、むしろ二〇世紀後半に至ってついに実現したからである。一九五三年のワトソン・クリックによるDNAの二重らせんモデルの提起は、「遺伝現象にまつていた幽霊」を追放し、遺伝の分子レベルでのメカニズムを解明した。つまり、生物学

では機械論的、要素論的方法による研究が主流であり、多くの成果をもたらしている、と長野氏は現状を指摘する。

現代天文学では、「無限の広がり」を持つニュートンの宇宙観は否定されるに至っている。小尾氏によれば、宇宙はおよそ一〇〇〜二〇〇億年前の時間も空間もないような密度と温度が極めて高い状態での「原始原子」の爆発によって創生し、膨張速度をしいだいに減じながら現在に至るといふ「進化する宇宙」あるいは「ビッグバン宇宙」が開示されているという。

近代科学の自然観がはじめから一つの体系を成していたわけではないように、現代科学の自然観もそれぞれの学問分野のなかで様々なかたちで無意識のうちに前提されているにちがいない。そうしたなかで、日々の実証的研究を一時中断してこのセミナーに参加した若い学徒たちには、その前提となっている自然観を改めて自覚し直す良い機会になったといえるだろう。

以下に各指導教授の発言及び参加者が最終セッションの討論のために提出したメモのいくつかを紹介することで、三日間に亘って提起された多様な議論の要約にかえたい。

Ⅲ 現代天文学からみた宇宙像

放送大学教授 小尾信彌氏

▼ディスカッション

東海大学工学部教授 辻 哲夫氏

東京工業大学工学部教授 吉田夏彦氏

▼運営委員

同 竹内 啓氏

同 江沢 洋氏

東京大学理学部教授 尾本恵市氏

▼参加学生22名(内女子4名)

筑波(5)、東京(4)、東北・早稲田(各

を及ぼしてきたが、相對論と量子論による現代科学は、どのような自然観を形成しつつあるのか、またそれはどのような社会的、思想的影響を与えつつあるのか。こうした主旨のもとに開催されたこのセミナーは、同時に大学セミナー・ハウスの活動に大きな貢献をされた物理学者の故山内恭彦先生を追慕する記念セミナーでもあった。会期二日午後には故山内先生の追悼記念会が行われたが(8頁9頁に別掲)、終始、この企てに多大

* * *

再考・科学的真理

物質・生命・宇宙

「物理理論は、自然の中に始めからある法則を掘り出すものだとされますが、それは、あくまで人間がある一つの見方から作ったものです。ですから、犬やミミズだったら、また別の理論を作ると思うのです。……理論というのは、要するにあてずっぽうです。ニュートンやアインシュタインは、非常にうまいあてずっぽうをやったのであり、それが彼らの偉いところなのです。……理論とは、半分自然、半分人間という感じのもので、人間の論理を使って、人間だけで喋っているから、あらゆるところに通用する法則のような気がしますが、人間が見ているのは非常に狭い範囲なんじゃないでしょうか。」

以上は、二日目の追悼記念会で録音テープから流された故山内恭彦博士の言葉である。ここには、氏の自然科学に対する基本的姿勢が端的に提示されている。この理論物理学の泰斗からの発言は、われわれが普段何気なく用いている「科学的真理」という言葉の持つ意味を再考させてくれる。

以下では、「物質」、「生命」、「宇宙」の三つの軸を巡って展開された各講師の発言の中から、現代科学を形作る基本的性格に関する部分を抽出し、現代に生きるわれわれが「自然」や「世界」を八科学的に捉えてゆく際の手掛かりとしてみたい。

■尾本恵市氏（人類学） 科学は他の自然界にはない一つの特徴を持っていま

す。それは価値判断ということですが、われわれは、いろんな伝統をやみくもにコピーしているわけではなく、その集団の価値体系に基づいて伝統を *modify* しながら、歴史を形作ってきたのです。これは他の動物には見ることのできないことです。……人類学者にとって、精神や科学とはある集団の持っている価値体系に他なりません。この意味では、自然科学は西洋近代文明だけの文化だと思いますが、われわれはちょうど英語を習うのと同じ形で、それを習うことができるわけです。

■竹内 啓氏（統計学） 科学も人間の精神的活動の一部である以上、社会全体の文化の中に位置付けられねばならないし、文化のあり方によって当然影響されていると思います。しかし、それと科学自体の持っている一種の自律的な価値体系とは、やはり区別して考える必要があると思います。

私は、科学自体の持っている価値体系の中にやたらに相対主義を持ち込むのは、絶対反対であると言いたい。科学は、多くの経験的事象をいかに説得的に説明できるかという点で、原則的に勝負をつけられるものだと思います。

■吉田夏彦氏（哲学） 自然科学が他の自然観や世界観より優れているから、勝負がつけられるという考えには、私は反対です。というのは、科学のルールに従ってやっている以上は、自然科学が勝つのは当たり前だからです。

パラダイム論が指摘していることは、パラダイム同士が衝突した時に、勝負のルールが違うのだから、どちらか一方のルールで他を否定することはできないということですが、私は、自然科学が優れているということも、自然科学から独立の基準によって証明することは不可能だと思います。自然科学的にものを考えることがいいというドグマの中に浸って生きている人々の間で普遍性があるということ、自然科学が、本来世界的な普遍性を持っているということは別の問題です。

■江沢 洋氏（理論物理学） ある量を測定して、その結果が理論の予想と合うかどうかを調べるのが検証ですが、最近の素粒子論が問題にしている現象は、正確な予言が非常に難しい。量子力学は、すべて確率の世界ですが、実験で正確な値を得るのが難しい上に、非常に稀にか起こらない現象を扱わなければならぬので、多数の測定をして、統計を取り、確率を決めるわけにはいかないのです。

■長野 敬氏（生物学） 現代の生物学では、分子機械としての人間観が次第に確立されつつあります。……脳の機能も結局は遺伝子に依存しているのですから、人間の精神現象の解明にもこの考え方が適用され、近年その徴候が現われています。

例えば、網膜の神経細胞に微小電極を差し込み、細胞が興奮した時の電位変化を確実に捉える技術が開発された結果、

人間の眼が、テレビ受像器のように三原色を受ける細胞の組み合わせによって、色を見分けることがわかりました。光の感受は、認識などの高級な精神活動とは言えないかも知れませんが、人間の中枢神経系の一つの働きであることは間違いないと思います。現在の遺伝子の知識はこのようなところまで踏み込みつつあるのです。現代の生命観との関連で言えば、このようなアプローチで、どこまで精神現象をつかまえられるかが、今後の課題だと思います。

■小尾信彌氏（天体物理学） 宇宙論とは、「自分がどこにいるか」を研究する学問ですが、その意味では、結局、哲学、宗教、芸術と同じところを目指しているように思われます。……われわれの宇宙は様々な天体の集りですが、天体と宇宙は概念的にかなり違ってきます。月や太陽のような天体に対しては、かなりの拡大解釈を必要とするにしても、一つの物理的な対象として、地球上の実験室で確かめられた物理の理論をそのまま応用することができません。しかし、天体の集りとしての宇宙は、普通の物理学が対象としている現象とは質的に違っています。われわれが住んでいる宇宙はたった一つであり、そこには再現性もなく、他と比較することもできないからです。その意味では、宇宙は自然科学の一般的な対象とはなりにくい性質を持っており、自然科学がいくら進んでも宇宙を理解したことにはならないのかも知れません。

現代科学の自然観に寄せて

筑波大学大学院生物科学研究科博士課程3年

山崎 芳仁

今回のセミナーのテーマは面白い問題をたくさん含んでおり、演習の際にいろいろな問題提起がされていた。「自然科学的な手法とは対象を数学的に記述することなのか。」「自然科学的思考方法は近代西欧文明と深く関わっているのではないか。」「自然科学によって人間の精神の研究はどこまで行えるのか。これらはどれもじっくりと時間をかけて討論する価値のある問題だった。しかし問題はたくさんあったが、時間は少ししかなかった。そのための一つ一つの問題に対する突っ込みが不足してしまつたように思える。殆ど取り上げられなかった問題も残ってしまったようだ。僕と同室になつた西野君は、「現代科学の自然観が現代の人間にどのような影響を与えているのか考えたい」と言っていたが、そのような問題は最終日に僅かに触れられたに過ぎなかった。残念ながら僕の話したことも殆ど取り上げられなかった。僕は普段は大学の研究室で発生学の研究を行っている。毎日の研究で問題に行っていることは非常に狭い分野である。そこでこのセミナーで自然科学の研究の総合として現在どのような自然観が広く受け入れられているのか考えたかった。さらにその自然観が作られる過程で見落とされ



最終セッションで各自の意見を発表する (大学院セミナー館)

てしまう研究上の問題点について話していたかった。自然科学者以外の人の現代科学の自然観に対する意見も聞きたかつた。しかしこのような具体的な問題は十分討論されなかつた。冒頭で紹介した問題についても討論は抽象的なものであり、具体的な事実が殆ど出てこなかつた。二日目の夜に話題になった印刷機などについての話題は具体的な話が始まるきっかけだったように思えるが、討論がうまく続かなかつたのは残念だった。僕が期待していたことについての収穫は余り得られなかつたが、予想していなかつた収穫がいくつかあつた。一つは人間の精神を研究する態度として僕が考えていたことが、デカルト的な態度だと吉田先生に指摘されたことである。僕は自

参加者の感想から

科学に対する「哲学」の確立

東京大学大学院理学系博士課程2年

吉川 真

現代の人間社会においては、科学技術というものが必要不可欠のものとなつているが、その進歩が急速かつ広範囲であるため、科学の全体像というものをつかむことは非常に難しい。現代科学が向かつている方向というのが、人間社会にとって本当に好ましいものであるのだろうか。このまま科学だけがひとり歩きして、自滅の道をたどるという可能性はないのであろうか。もしそのような可能性があるとすれば、それを防ぐ手段としてどのようなものが考えられるのであろうか。このような状況のもとで、我々研究者はただやみくもに成果をだせばいいのではなく、科学に対してある種の「哲学」のようなものを確立していく必要があるのではないだろうか。

因果論は本当に覆されたか

筑波大学大学院生物科学研究科博士課程3年

山崎 芳仁

今回の話を聞いても因果論が物理学において覆されている印象はもてなかつた。また、主体と客体の分離とされるが、不確定性原理においても、観察すべき対象は運動しており、その位置や運動量を決められないということでは、やはり主体と客体は別々に存在していると考えられるのではないだろうか。測定できた時にそれを客体と呼ぶのなら主客不

分の考え方がデカルト的だとは思つてもいなかつたので少し驚いた。セミナーから帰ってきて早速デカルトの「方法序説」を読んでみたが、現代にも通じる問題意識を持って書かれており、大変参考になった。吉田先生にはよいことを教えていただいたと感謝している。もう一つは科学と人間生活の関係、科

分離だが、それでは素粒子の世界に限らずにその前提から古典物理学の世界でも主客分離ということになつてしまふ。素粒子物理学が本当に因果論、認識論に影響を与えたのかまだ理解できない。

最後に、科学の相対主義、真理の相対化には賛成できない。科学が真理としていることは、どのような文化でも成り立つことを注意深く選んで議論しているはずである。絶対的な真理を求めていると思う。

生物学は「科学」か

東京理科大学理学部物理学科4年

佐久間和彦

生物学は科学でないという意見が一部で出された。その論拠は、生物学は記載的であつて、何らかの帰納的な結論を出そうとか、数学にのせようとあつていないというものだった。しかしながら、このような主張の背景には物理的世界観があるのではないか。物理学とは、様々な自然現象を統一・普遍的に数学を用いて記述したものであつて、その成功によって、他の諸科学もそれに学ばべきだと思つている。

だが、人々はニュートン力学、量子力学そして相対論の成功に、その日常的な営みには存在しない亡霊を見ているのではないか。私はレーザの研究をやっているが、それは実際にどうとらえていて、ちつとも美しくなく、記載的のすらある。

生物学はやはり科学なのだ。してみると自然科学とは、自然の諸現象を実験・観察を通して理解する人間の営みであると言える。

学者の社会的責任などについて真面目に考えている人たちと出会えたことである。目の前の研究上の問題にばかり気を取られていて、最近そのような問題について考えていなかつたことを反省させられた。二泊三日のセミナーを終え、以前より少し視野が広まつたような気がしている。

第10回 大学合同 セミナー

主題 —— 日本的経営 —— —— その過去・現在・未来 ——

期 日
'87.6.19~21

▼基調講演

日本の経営論の位相

立教大学名誉教授 三戸 公氏
東洋大学経営学部教授

▼参加学生88名(内女子2名)
千葉商科(32)、関東学院(17)、駒沢(16)、
立教(15)、新潟(6)、その他(2)、
以上5校

▼ゲスト講演

I 日本のならざるサラリーマン体験

日本大学商学部教授 友安一夫氏

II わが体験的日本的経営

(株) ウェストン常務取締役管理本部長 大杉耕一氏

大杉耕一氏

▼セクション演習

A 日本の経営の源流

今回のテーマ「日本的経営」は、今日の隆盛を見ることになった日本企業とは何であるのか、その強さをもたらした日本的経営のあり方とは何であるのかを考えようとするものである。このことは単に日本企業の行動を肯定することではなく、貿易不均衡を通じて未曾有の世界的

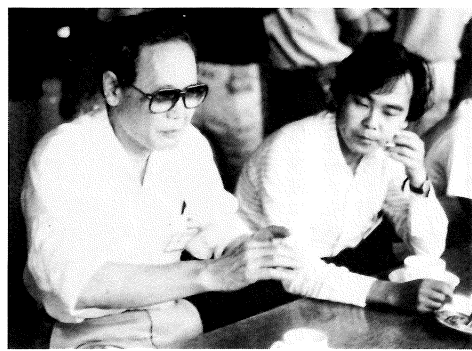
れも三戸氏の教え子であり、各ゼミから、いわば孫弟子に当る88名の経営学専攻の学生たちが参加した。

事前に上記の四セクションに掲げられたテーマ別に学生間の討議が行われ、セミナーの当日を迎えた。プログラムは、まず始めに三戸氏の基調講演が行われ、今日の日本の経営論が有する課題の本質の解題がなされた。セクション演習では、各大学を中心に学習されてきた成果が報告され討議された。

翌二日目は演習をはさんで、二つのゲスト講演が行われた。友安一夫氏は自らの経験的事実に立った日本の経営分析への視点を提起され、また大杉耕一氏は、住友銀行ロンドン支店での経験による日英の経営比較から、日本企業が世界企業として受容されるようなバランス感覚を持つべきだと主張された。最後の全体集

- B 新潟大学経済学部教授 鈴木辰治氏
構造変化と日本の経営
関東学院大学経済学部助教授 高橋公夫氏
- C 日本の経営の国際化
駒沢大学経済学部教授 石井修二氏
新人類と日本的経営
千葉商科大学商経学部助教授 麻生 幸氏
- D 麻生 幸氏
三戸 公氏
麻生 幸氏

経済危機をつくり出しつつある日本企業の行動原理を明らかにし、その変容の可能性を探ろうとするものであった。このセミナーは同時に、この三月に立教大学を定年退職された三戸公先生への感謝をこめて企画されたものである。先生は昭和46年に当ハウスを初利用されてより、実に30回に及ぶゼミ合宿を続けてこられ、学生とともに学び合うことを楽しみにしてこられた「教師」であった。主旨に賛同して参加された鈴木辰治、高橋公夫、石井修二、麻生幸の四氏はいず



コーヒーブレイクのひととき——中央・三戸公氏



記念植樹を終えて

会では、二日間で提起された問題の総括が行われ、日本的経営の将来をめぐって、厳しい見方が次々と出された。

◆ 今回の合同セミナーの特色は、何と云っても恩師を中心として、和やかな交流風景が幾重にも広がったことだろう。参加者から集められた寄付金で購入された「ひめしゃら」の記念植樹が遠来荘の庭で行われたのもその一つであった。鎌入れには、ハウスで行われたゼミ合宿を終始温かく見守り、三戸ゼミとの交流を深めてこられた現名誉館長・飯田宗一郎氏もはせ参じ、三戸氏の労をねぎらわれた。

故山内恭彦先生追悼記念会

「現代科学の自然観」をテーマとする共同セミナーを捧げて

'87年7月4日

折から降り続いてきた雨は、7月4日の朝には見事に晴れ上った。故山内恭彦先生の弟子、後輩、同僚に当る物理学の研究者をはじめ、生前、先生とご親交のあった様々な領域の方々約70名が参集され、別記プログラムの要領で追悼記念会が催された。

故山内先生は、原子スペクトル理論を中心に広く研究を推進された数理物理学者として高名であるばかりでなく、幅広い識見を備えた文字通りの碩学であられた。晩年の先生は大学セミナー・ハウスの事業に強い関心を示され、その学識をいかに発揮されて大学共同セミナーの基盤作りに多大の貢献をされたのである。

ハウスは、昨年10月13日、84歳で世を去られた先生を追慕し、「現代科学の自然観」をテーマとする第8回大学院共同セミナーを追悼記念会に併せて開催した。三部からなる追悼記念会には共同セミナーの参加者も列席し、来賓とともに大先達の人と業績を偲んだ。



挨拶に立たれる山内富貴子夫人、右は司会の鈴木皇氏

プログラム

第一部 追悼記念講演 (15時30分～16時30分) …… (講堂)

挨拶 当ハウス理事長 中川秀恭

講演 素粒子物理学の現状と将来

— 山内恭彦先生とその物理 —

東京大学理学部教授 宮沢弘成

(司会) 学習院大学理学部教授 江沢 洋

第二部 追悼の集い (16時45分～19時30分) …… (講堂)

奏楽 グレゴリアン聖歌

ATTENDE DOMINEより

思い出を語る(一)

当ハウス名誉館長 飯田宗一郎

東京大学名誉教授 植村泰忠

上智大学生命科学研究所教授 柳瀬睦男

第一部の記念講演は、山内先生のいちばん弟子である宮沢弘成氏によって行われた。故山内先生の時代の量子力学が、その後どのように展開しているかを、OPPを使いながら語られ、ひも理論

琴合奏 八橋檢校作曲 乱輪舌

東京大学箏曲研究会有志

思い出を語る(二)

放送大学教授 大森莊蔵

東京工業大学工学部教授 吉田夏彦

東京大学教養学部教授 芳賀 徹

大阪大学名誉教授 永宮健夫

故人は語る — 録音テープから —

挨拶 山内富貴子

奏楽 (司会) 上智大学理工学部教授 鈴木 皇

第三部 交歓夕食パーティー (19時30分～20時30分) …… (食堂)

挨拶 東京大学理学部教授 有馬朗人

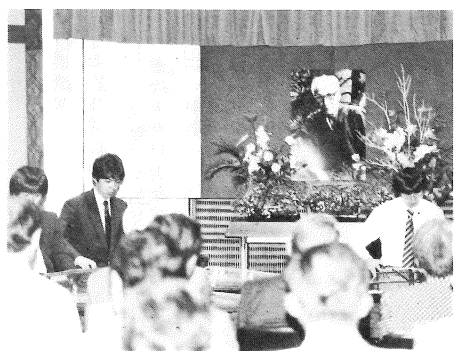
スピーチ 東京大学名誉教授 小谷正雄

東京大学名誉教授 大内 力

(司会) 当ハウス企画室長 飯田能子

大学セミナー・ハウスとの関係

| | |
|----------|--|
| 65年4月25日 | 開館を前に建築工事中間披露に出席し、はじめて多摩の丘に登る。 |
| 7月6日 | 開館記念・第1回大学共同セミナー「世界の日本の国民性と科学の国際性」と題する全体講義を行う。 |
| 66年1月14日 | 第3回大学共同セミナー「科学と宗教」で「科学と因果性」と題する全体講義を行う。 |
| 4月 | 企画委員会の顧問をつとめる(1971年3月)。 |
| 67年1月1日 | 学識経験者として評議員に就任(1974年3月)。 |
| 7月10日 | 千人会の発会とともに会員第1号となる。 |
| 68年12月6日 | 第20回大学共同セミナー「コンピュータ時代の人間」で主題講演を行う。 |
| 69年7月5日 | 「開館四周年を祝う夕べ」に朝水振一郎先生とともに出席。「絶学無憂」とサイン帳に揮毫。 |
| 70年4月1日 | 理事に就任(1974年3月)。 |
| 5月9日 | 常務理事に就任(1972年3月)。 |
| 70年4月1日 | 第28回大学共同セミナー「現代文明の諸問題」で「現代科学と人間」と題して全体講義を行う。 |
| 11月25日 | 開館5周年記念論文集「現代科学と人間」山内恭彦編(中央公論社)刊行。 |
| 72年3月12日 | 第46回大学共同セミナー「自然界の対称性」の中で行われた山内先生と朝永先生を囲む会に出席。 |
| 7月22日 | 古稀記念「絶学無憂の碑」除幕式。 |
| 74年4月1日 | 法人顧問に推挙される。 |
| 75年5月 | 多摩の民家を遠来荘と命名。 |
| 79年7月31日 | 山内恭彦先生の喜寿を祝う会(於・遠来荘)。 |
| 80年1月13日 | 西谷啓治、三枝充恵両先生とともに「私の自然観」と題して座談会を行う。 |



遺影の前に琴の音が流れる会場

思い出を語る 追悼メッセージから

眞Distinguished person

上智大学生命科学研究所教授 柳瀬睦男

目の前のお写真を拝見していると、昔、私がアメリカのプリンストンにおりました頃、山内先生が私を訪ねてこられた時のことを思い出しました。研究所のセクレタリーが、あの distinguished looking professor は誰か、ときいたのです。私は今日のお話の結論で申し上げたいと思っただけで、先生は単に distinguished looking だけでなく、本当に distinguished person であつたということがあります。

私は今、飯田、植村両先生のお話を伺つて、本当になつかしさがこみ上げてきたわけですが、確かに先生はこのセミナー・ハウスには心残りをされて、何かその辺を漂って、私たちを眺め、時々あの皮肉な言葉を発せられたり、また優しい目で見下さっているのだろう、という気がしきりにします。

私は、大学で先生の講義を伺つたことではないのですが、司祭になつてから、もう一度物理を勉強したいということでご相談した時、ウイグナーのところへ行け、とおっしゃって早速、紹介の手紙を書いて下さいました。山内先生とウイグナー先生はお人柄、人の扱い方は全く対照的で、よくもこう違った先生が同じような問題を同じような形で研究されている

な、と感心しました。表面的には違つておられても、その心は大変似ているところがありません。それは真理に対する厳しさです。先生はご自分を律するためにも、また人に対する時にも、真理を決して曲げてはいけない、という姿勢を貫かれました。

私はこういう僧職にあつたものですから、先生は私と時々宗教的な問題を語られたのですが、上智大学理工学部の15周年記念号に先生は、ここには外国人や日本人の神父さんが沢山いて、時々、私が信仰の話をしてほしいと声をかけるが、どうも無縁の衆生と思われているのか、一向に呼び込みをしてくれない、と書いておられるのです。晩年、先生があれ程信仰に入つたことを喜ばれ、「本当にありがとう」と、私に述べて下さつた先生の、その澄んだ眼を拝見した時に、先生は決して病気になるからそのことを考えられたのではなく、学問を始められた頃から考えておられたということがわかりました。

山内先生と哲学

——常人への復帰運動

放送大学教授 大森 莊蔵

私は、ここにおられる小谷正雄先生のところで、植村さんと一緒に物理を教えたいだいでいたのですが、山内先生は小谷先生と親しい間柄でいらして、よくそこにおいでになつたのです。しかし、物理上の縁はそれでおしまい、山内先

生が戦後、「科学と哲学の会」をお始めになつてから、いつもお相手をさせていただいたのです。

山内先生が物理学のご専門でありながら、どうして哲学のような奇妙なものに関心を向けられたかは、私にちよつとした感想があります。先程の宮沢先生のお考えを拝借すれば、人間は田満具足の完全な対称性を持つて生まれてくるが、どこかが破れた時に非対称になる。山内先生はすぐれた高名な専門家になられたが、年をとられて死ということをお考えになつた時に、もう一度、元の対称性をお求めになつたのではないだろうか。晩年、先生がよく山に行かれて、美しい景色を写真に撮られて年賀状になつたが、自然の美しさに激しい関心を抱かれたのも、そうした復元運動だったのではないのでしょうか。私は、山内先生が最後にカソリックに入信なさつたのも、その上で考えてみたかつたわけです。

実は山内先生の常人復帰運動にお酒がありました。私にとつてもっともなつかしいのは、渋谷や神田の街を、空を眺め、少ししるめきながら歩いていかれる先生の後姿です。先生は話のタネがつかれば、必ず宗教まがいのことをおっしゃいます。「キリスト教というのはインチキだね、君」、そういった調子で私の同意を求められるわけです。先生は確かに何か気にかかつておられたと思います。それらのことをすべてひっくり返して、山内先生は常人にお帰りにならうとしたのだ

に触れて、物理学の最先端をわかりやすく紹介された。

第二部の追悼の集いでは六名の方々から先生の思い出を語っていただいたが、参会者はそれぞれの思いを新たにするところとなり、それまで書物を通して知るだけの学生たちにとっては、先生の存在を身近に感じるまたない機会となつたに違いない。紙幅の都合でその全部をご紹介できないので、柳瀬睦男・大森莊蔵両氏のお話の要約を上掲掲載した。

この追悼記念会の企画・運営には、世話人の労をとられた有馬朗人、鈴木皇、江沢洋の三氏に終始多大のご厚意をいただいたことを記して、感謝のことばにかえたい。

主なる来賓（敬称略）

荒井秀男、猪木慶治、飯田修一、石川孝夫、今井功、飯尾右二、植村泰忠、一ノ瀬秀男、江沢洋、海老沢克之、小尾信彌、尾本恵市、加藤正昭、川野洋、河田喬夫、木下是雄、栗原一郎、熊倉功二、逆瀬川隼人、佐藤伸二、島和久、鈴木洋、杉浦光夫、鈴木和子、田野倉教、竹内啓、辻哲夫、武部尚雄、土田美芳、久、ホネット・ピセンテ、松浦正己、牧野正久、松崎義徳、三宅彰、三宅和夫、村松武司、森平勇三、森田正人、山内洋子、山本健二、山田勝美、芳野越夫、吉田幸弘、山本俊一、渡辺勝、和田守弘

と、私には思えるのです。

山内先生に乞われて、このセミナー・ハウスにお邪魔した時、飯田館長差し入れのウイスキーで夜のふけるのも知らずに山内先生とおしゃべりをしたことが、今は一番なつかしく思い出されます。

第65回理事会

87年8月20日/国立教育会館(虎の門)

△出席者▽

(理事) 中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、鈴木皇、崎田直次、立野晴夫、小山五郎(代理滝澤英一)
(監事) 喜多勲

△開館20周年記念事業国際館の建設について

中川理事長が開会の挨拶の後議長となり議事に入る。立野専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち各案件を承認可決した。
▽開館20周年記念事業国際館の建設について

①資金計画・事業計画について

現時点における資金計画は合計二億八、八五〇万円、その内訳は寄付金総額(見込みを含む)一億四、六〇〇万円、前回寄付金残額三、三〇〇万円、修繕・減価償却積立金三、三五〇万円、繰越収支差額七、六〇〇万円。

事業計画は建物本体に二億円、設計料一、四〇〇万円、什器・道路・外構一、〇〇〇万円、排水処理施設三、五〇〇万円、食堂改修等一、九五〇万円である。

以上の通り資金不足額四、二五〇万円について日本船舶振興会の補助金交付を申請して事業計画の実現を期したい。

建設のスケジュールは62年12月末設計完了、役所関係等所要の手続を経て63年6月着工、64年1月竣工の予定である。

②新国際館の建設候補地について

前回理事会で報告したところであるが、その後一部から候補地について意見があったので、これを運営委員会にはかりその進言により候補地の選定について第三者の専門家の検討を求めるとなった。理事長はこれを日建設計に依頼しA地点(一福亭南斜面)を選択することを勧める「大学セミナー・ハウス国際館敷地の検討」を得た。運営委員会はその検討結果について更に慎重な討議を重ねて理事長に対して「A地点に建設することが適当である」とする答申を提出された。

以上の提案があり、A地点を新国際館建設の敷地とすることが承認された。

③設計契約および工事契約について

設計については創立以来吉阪先生およびU研究室が担当してきたので引き続き設計契約を締結したい旨提案があり承認された。工事契約については入札か特命かについて意見があり、入札とすることとして数社の複数の見積りをとることになった。
▽その他
役員人事および職能資格制度について

昭和62年度

第1回共同セミナー委員会

87年6月10日/私学会館

新任委員を迎えて

委員長に竹内啓東大教授を再任

(出席者) 小浪充、江沢洋、戸沼幸市、山下幸夫、栗原彬、鈴木一郎、鈴木和子、竹内啓、坂本百大、中野収、桜井哲夫、袖井孝子、小川捷之、笹川紀勝、土屋哲、アンセルモ・マタイス(敬称略)

本年度第1回委員会は前記の16名に、ハウス側から中川館長、企画室スタッフ3名が出席して開催された。

本年度委員会は5名の新任委員を迎え、23名の陣容でスタートした(委員名簿を別掲)。

△主な議事▽

(1) 委員長の選出と副委員長の指名
前年度に引き続き竹内啓氏を委員長に、江沢洋、小浪充両氏を副委員長に選出した。

(2) 前年度教育プログラムの総括
共同セミナー(4回分)の参加者数の平均がはじめて50人を割り込んだことをめぐり、共同セミナーへの実施回数配分、修了証の発行の是非等の意見が出され、検討していくことになった。

(3) 本年度後半及び次年度プログラムの企画について

昭和62年度共同セミナー委員名簿

(就任順、敬称略、○印は新任)

△委員長▽

竹内 啓 東京大学 教授

△副委員長▽

江沢 洋 学習院大学 教授

小浪 充 東京外国語大学 教授

△委員▽

小田 晋 筑波大学 教授

戸沼幸市 早稲田大学 教授

山下幸夫 中央大学 教授

池上嘉彦 東京大学 教授

栗原 彬 立教大学 教授

鈴木一郎 津田塾大学 教授

鈴木和子 日本女子大学 教授

室田 武 一橋大学 助教授

合田周平 電気通信大学 教授

川端香男里 東京大学 教授

坂本百大 青山学院大学 教授

中野 収 法政大学 教授

坂部 恵 東京大学 教授

桜井哲夫 東京経済大学 助教授

袖井孝子 お茶の水女子大学 助教授

○小川捷之 横浜国立大学 教授

○笹川紀勝 国際基督教大学 教授

○佐藤敬三 埼玉大学 教授

○土屋 哲 明治大学 教授

○アンセルモ・マタイス(上智大学) 教授

国際館建設のための 開館20周年記念募金第五回報告

(87年8月末日現在)

申込総額 一二八、二二九、〇〇〇円
(内入金済 一二五、二八九、〇〇〇円)

内訳
財界関係 六〇件 一一、九二四万円
大学 三三件 四〇六万円
一般 一九件 七〇五、〇〇〇円
個人 二四二件 四、二一四、〇〇〇円

●寄付申込者(芳名)(申込順)

◎財界関係

三井東洋化学株式会社殿
ライオン株式会社殿
富士電機株式会社殿
三菱商事株式会社殿
日本自動車工業会殿
吉田工業株式会社殿
住友化学工業株式会社殿
三菱化成工業株式会社殿
昭和電工株式会社殿
日本電気株式会社殿
株式会社明電舎殿
三井石油化学工業株式会社殿
三菱電機株式会社殿
松下電器産業株式会社殿
日本化学繊維協会殿
鐘淵化学工業株式会社殿
株式会社日立製作所殿
沖電気工業株式会社殿

富士通株式会社殿

◎大学

明星学苑殿

◎一般

一〇〇、〇〇〇円 多摩中央信用金庫殿
個人
三〇、〇〇〇円 明治大学教授 土屋 哲殿
五、〇〇〇円 会社員 生山智己殿
一〇、〇〇〇円 早稲田大学教授 浅井邦二殿

第7回開館20周年 記念事業特別委員会

87年8月20日国立教育会館(虎の門)

出席者 中川秀恭、宇野重昭、岡宏子、
崎田直次、鈴木皇、立野晴夫

(順不同、敬称略)

▽募金の進捗状況について

当初の募金目標額三億五、〇〇〇万円の達成状況について8月15日現在募金実績一億三、一一九万円(47%)見込額一、五一一五万円合計一億四、六三四万円(53・2%)経団連ベースについては65・68%の達成であるが、ハウス自助努力分特定寄付五、〇〇〇万円の目標に対し二六〇万円(5・2%)の状況である。従ってその分だけ自己資金拠出が多くなるので資金繰り上の配慮を要する。

▽開館20周年記念事業国際館の建設について

資金計画、事業計画、新国際館の建設候補地、設計契約および工事契約についてその詳細は別記理事会議事に同じ。

千人会

87年6月～8月

◇現在会員一、五二〇名(実会員数)

(通算入会者一、七九一名)

◇新しく会員となられた方々

5名(第7回報告(申込順))

A 日本アイ・ビー・エム(株) 鳥井 滋殿
B 神奈川大学助教授 深澤 俊昭殿
C 関東学院大学助教授 高橋 公夫殿
C 千葉商科大学助教授 麻生 幸殿
C (株)羽鳥設計 福島 重美殿

◇会費ありがとうございます。

石井修二、篠沢秀夫、古畑和孝、竹内喜夫、佐野幹夫、佐藤進、田中未来、藤井耕一、黒田成俊、松井源吉、福田延衛、小島守生、野沢浩、長岩寛、荒川有史、宅間宏、村田勝彦、林卓男、島田淳子、安宅光雄、原田富士雄、西川治、小倉充夫、柳下勇、鶴見和子、二谷貞夫、相澤忠一、高木健太郎、上野芳夫、中村幸安、荒川基、岡田正弘、柴田恭二、嶺哲之助、江沢洋、猪瀬尚志、見田宗介、中山光雄、栗原尚子、西澤宗弘、山本襄治、長谷川幸男、大内力、吉田幸弘、合田周平、古西信夫、川田侃、長清子、細谷千博、白井久和、笹森健、今堀和友、松平文朗、高橋勇悦、望月継治、栗林恒雄、三浦徳弘、高橋康之、金子晃、伏見康治、太田秀通、立川明、奥村敏恵、石川達雄、中野スミ子、佐久間まゆみ、北野美枝子、川内脩司、鳥海俊宏、阿部斉、和田英一、原口隆英、柴田政利、朱牟田夏雄、松崎奈岐、土田美芳、石井進、松尾浩也、名東孝二、村田一也、讃岐和家、中村哲哉、辻達也、中村登志哉、慶谷伸代、鈴木努、黒田道雄、川田雄一、内山尚三、吉松藤子、三橋文雄、宮本勉、中村進、中村浩三、小池滋、藤平重雄、川島須美子、太田善廣、田島恵児、坂田道太、村瀬興雄、三和治、橋谷卓成、中川一郎、秀村欣二、矢部章彦、松島恵、谷下市松、詫摩武俊、西村敏男、綿引二郎、藤原鏡男、大畑篤四郎、和田義信、篠田長世、佐藤美喜子、深澤俊昭、国分久子、林泰造、金谷憲、石川馨、梅沢豊、角瀬保雄、林海博明、川原啓美、奥田夏子、児玉久雄、林俊一、三

◇千人会からのたより◇

まだ御地へ行く機会が作れないでいます
が、いざれお世話になりたいと思っております。

◇学習院大学教授 篠沢秀夫

本年三月に横浜市立大学を定年退職しました。在任中は度々セミナー・ハウスを利用していただきました。

◇日本大学教授 柳下 勇

本年三月で明星大学を定年退職しました。今回よりC会員にお願いします。

◇東京都立大学名誉教授 川田雄一

最近、長期海外研究より帰国致しました。

◇東京経済大学教授 色川大吉

古稀〇祝詞深謝拝読。この年まで生かされた感謝と、若くして戦争のため死んだ多くの友人、同胞、全世界の人々の鎮魂の思いをこめて、ワシントンに反核風を上げに行きます。

◇元長野工業高等専門学校教授 鹿島健次

三月に松下政経塾を卒業しました。来夏は日本におりませんが、千人会費二年分をお送りします。企画室の皆様によりしくお伝え下さい。九月より米国ミネソタ大学ハンフリー・インスティテュートに留学します。内外政策研究会大東事務所 本間正人

87年6・7・8月

夏の多彩な合宿研修から

7月に「八王子で39度」が記録されるなどの猛暑であったが、この夏も多摩の丘は多忙な研修スケジュールをこなす人々で賑わった。昨年は講堂を含むすべての研修室のクーラー化計画が完了した



②

①

③

■女子大学の新生

オリエンテーション3題■

- ①お茶の水女子大学3学部・19学科のすべての合宿を終えて「さあ夏休み」7・13
- ②津田塾大学国際関係学科シンポジウム風景(講堂) 5・8
- ③十文字学園女子短期大学の記念植樹——鋤入れをする中川館長 4・30

が、今夏はついに食堂などの冷房化も実現し、熱心な来泊者へのタイムリーな「暑中見舞」とすることができた。7月5日でハウスは開館して22周年。この間の宿泊利用は、二万八八七ケルプ、延べ九七万七九人である。本年度中に一〇〇万人の大会到達が見込まれている。

●大学間交流の着実な実践

15周年を迎えた十大学合同セミナー6月末の開催が恒例となっている十大学合同セミナーは、今年15回目を記録した。今回のテーマは「60年代再考」で、参加者は一八一名であった。この合同セ

ミナーの前身は、73年に七大学の外交史・国際関係論専攻のゼミが連合して行った第56回大学共同セミナーである。当時は新しい大学間交流のテストケースであった。当初から学生が運営に参加し、第4回目からは当ハウスの経済的後援から独立して自主ゼミとなったが、この種の大学間交流が十五年の長きに亘って続けられているケースは極めて少ないといわれる。当ハウスをこのような交流の場

1987 INTERNATIONAL SEMINAR ON JAPANESE BUSINESS AND MANAGEMENT

The Japanese are the most hospitable, generous and kind people that I have ever met. The Seminar House provided a unique opportunity to closely interact with many wonderful Japanese. I will always fondly remember my stay in Japan.

Mark Donohue, Babson College (写真右端)

After two weeks on the road, my friends and I really miss the plain living and high thinking life up in the Seminar House. New York University is located in city where students are deprived of a natural surrounding. Living in the Seminar House for about two weeks, we learned to appreciate things that we never took notice of before.

Yen Hong Wang, New York University (写真左端)



華道・茶道実演のあと 囲炉裏を囲む(遠来荘)

と定め、学習の継続を支えてこられた諸先生と歴代の実行委員諸氏に心から敬意を表するものである。

因みに七大学とは慶応、成蹊、上智、一橋、聖心女子、ICU、津田塾であり、80年には明治、神奈川が加わり九大学に、翌81年に早稲田が加わり十大学となっている。

●サマーセミナーは「第二のキャンパス」で

研究室主催の合宿セミナーのうち、夏の定例行事としてこの丘を利用されるグループの一つが、国際基督教大学の「心理学サマーセミナー」である。ここ数年7月上旬に3泊4日で行われている。ハウスにご縁の深い都留春夫、星野命、原一雄の各教授は院生、学部生と一体となつて、この合宿にのぞまれる。分科会

と全体会と親睦などが上手に組み合わせられていて、ハウスの施設や機能がうまく活用されているという印象を受ける。本号の「わたしたちの合宿」(14頁に別掲)を執筆して下さった山中淑江さんは、学部以来このセミナーに五回、都留ゼミの合宿でも何度か来泊されており、文字どおりハウスを「第二のキャンパス」にしておられる一人である。

●二つの訪日研修団

常連の米国大学日本研究グループ 産業能率大学主催の「1987 International Seminar on Japanese Business and Management」と国際教育交換協議会「Japanese Business and Society Prof. Tan 1987」がそれぞれ6月と8月に来泊した。この常連グループはすっかり夏の風物詩となった。前者は12泊し、研修

昭和62年度新入生オリエンテーション実施状況(4月～7月)

| 学 校 名 | 参 加 者 数 |
|---------------------------------|---|
| 4月 ●東京薬科大(新入生歓迎キャンプ) | * 264 (1) (92) |
| 杏林大・医学部 | * 114 (12) |
| 中央大・国際交流センター(外国人留学生) | 40 (5) (6) |
| 立教大・観光学科 | 160 (6) (18) |
| 共栄学園短大・生活学科 | 235 (32) |
| 共栄学園短大・英語学科 | 162 (25) |
| 杏林大・保健学部 | 136 (5) |
| 東京コンピュータ専門学校 | 245 (17) (2) |
| 東京コンピュータ専門学校 | 298 (17) (2) |
| 駒沢大・仏教学部 | 203 (20) |
| 日本女子大・家政経済学科 | 91 (10) |
| 学習院大・学生相談所 | 59 (5) (21) |
| 東京都立商科短大・経営学科Ⅱ部 | 116 (14) (30) |
| 産業能率短大・能率科第Ⅱ部 | 203 (17) (5) |
| 東京都立医療技術短大 | 236 (48) |
| 中央大・哲学科教育学専攻 | 84 (7) (6) |
| 東京純心女子短大・美術科、音楽科 | 130 (20) |
| 東京学芸大・幼稚園教育科 | 40 (5) (2) |
| 東京都立大・機械工学科 | 66 (6) |
| 大妻女子大・児童学科 | 138 (13) |
| 東京農工大・農工工学科 | 39 (8) |
| 日本女子大・社会福祉学科 | 119 (9) (6) |
| 慶応義塾大・国際センター(外国人留学生) | 94 (15) (35) |
| 産業能率短大・能率科第Ⅱ部 | 92 (9) |
| 中央大・心理学専攻 | 76 (1) (11) |
| 十文字学園女子短大・家政専攻 | 247 (7) (120) |
| 5月 ●東京職業訓練短期大学校・生産機械学科 | 61 (7) (23) |
| 武蔵工業大・電子通信工学科 | 160 (16) (26) |
| 津田塾大・国際関係学科 | 255 (21) (6) |
| 津田塾大・英文学科 | 297 (12) (6) |
| 東京学芸大・物理学教室 | 50 (4) (3) |
| 東京学芸大・化学教室 | 48 (4) (3) |
| 東京学芸大・理科教育教室 | 18 (2) (2) |
| 東京都立商科短大・商学科Ⅱ部 | 101 (16) (18) |
| 東京電機大・電子工学科 | 158 (4) (18) |
| 東京都立商科短大・商学科 | 273 (23) (35) |
| 東京都立立川短大・家政学科、食物学科 | 121 (25) |
| 文京女子短大・英語英文学科 | 297 (8) |
| 文京女子短大・英語英文学科 | 304 (9) |
| 東京都立科学技術大・機械システム工学科 | 56 (13) |
| 東京学芸大・数学教育学科 | 185 (9) (10) |
| 東京学芸大・生物学教室 | 50 (5) (4) |
| 埼玉大学・障害児学科 | 28 (7) |
| 埼玉大学・機械工学科 | 75 (5) |
| 東京電機大・建設工学科、産業機械工学科 | 193 (11) (3) |
| 東京電機大・数理工科、情報科学科 | 189 (13) (14) |
| 東京電機大・経営工学科、応用電子工学科 | 261 (19) (10) |
| 津田塾大・数学科 | 140 (11) (9) |
| 東京都立大・化学科 | 89 (9) (42) |
| 東京都立大・物理学科 | 40 (5) (15) |
| 東京薬科大・薬学部Gクラス | 86 (2) (5) |
| 東京薬科大・薬学部C、Dクラス | 133 (12) (5) |
| 職業訓練大学校・建築科、木材加工科、福祉工学科 | 72 (9) |
| 文教大学女子短大部・英語英文科 | * 257 (18) |
| 東京農工大・化学工学科 | 127 (12) (74) |
| 東京都立大・数学科 | 80 (11) (46) |
| 6月 ●東京都立大学・建築工学科 | 64 (11) |
| 白梅学園短期大学・保育科Aグループ | * 137 (13) |
| 白梅学園短期大学・保育科Bグループ | * 140 (15) |
| 明治学院大学・社会学科Ⅱ部 | 100 (10) |
| 東京薬科大学・薬学部E、Fクラス | 162 (4) (5) |
| 東京薬科大学・薬学部A、Bクラス | 144 (3) (6) |
| 早稲田大学・建築学科 | 222 (10) (27) |
| 7月 ●お茶の水女子大学・文教育学部(11学科) | 251 (25) |
| お茶の水女子大学・理、家政学部(8学科) | 293 (22) |
| 計66件(33校) | 実人数 9,404 (769) (771) 延人数 10,316 (828) (863) |

(注)参加者数の()内は教職員、()内は上級生で、ともに内数。*は2泊、他は1泊。実施順。

の合間には在泊グループと交流し、遠来荘での華道・茶道の実演を楽しんだ(感想文と写真を別掲)。

●今季の新入生オリエンテーションで、初の一人万台を記録

この春4月から続いた新入生合宿研修(オリエンテーション)は7月なかばのお茶の水女子大(三学部・一九学科・五四四名)で無事完了した。若葉から青葉への今季四ヵ月間に行われた、大学開

係・クラス単位以上の規模の合宿は別表に示すとおりで計六六件(二三三校)、参加者数は九、四〇四人(うち教職員七六九人、延べにすると一万三、一六八(八二八人)を数えた。前年に比べて件数で五、参加者数で延べ六九七人多い。このところ年ごとに増え続けてきたが、オリエンテーションでの利用者が一万人を超えたのは初めてである。

ちなみに開館二年後(67年)以降の記録を一〇年間隔で対比してみると、次のようになる。

| | | |
|------|----------|----------|
| '67年 | 八件(八校) | 二、五二五人 |
| '77年 | 三二件(二七校) | 四、七〇七人 |
| '87年 | 六六件(三三校) | 一〇、三二六八人 |

一〇年前に比べ、本年度は件数、参加者数とも倍以上の伸び率である。共同の生活体験の中でのオリエンテーションの意味が年々教職員・学生双方から高く評価されてきたことの証明でもあろう。

ハウスの歴史とともに歩み、その開催が20周年を迎えたグループもいくつか生

また。その一つ、東京学芸大数教教育学科の若桑英清教授は、この春開講のあいさつの中でこの二〇年を振り返り、次のように述べておられた。

「当時(諸君が生まれた頃)は、学園紛争のさなかでした。教師・学生のコミュニケーションの必要を痛感してこの行事を始めたのですが、その後この合宿は紛争の有無とは関係なく極めて有意義であることが改めて認識されて、今年で二〇年になります」

働きつつ、学びつつ——私の場合

財フランス語教育振興協会

「フランス語強化合宿」参加者

慶応病院勤務(慶大・仏文卒) 国見 亜矢

夏真っ盛りの八月下旬、七泊八日のフランス語強化合宿に参加しました。社会人一年生の私は、やっと捻出した夏休みを全部費しての参加でした。

大学時代に専攻したフランス語を忘れて

たくないという思いで申し込んだのですが、全く知らない人達と一週間も一緒に生活するのは、少なからず不安を感じていました。しかもプログラムを見れば、ほとんど一日中フランス語の授業を受け、授業中のみならず食事中まで日本語厳禁なのだというのですから、どんなに厳しい合宿だろうと気が重くて仕方ありませんでした。

ところが始まってみるとこれが仲々楽しいのです。総勢三十一名の少人数なので和気あいあいとしたムードですし、授業も講義一辺倒でなく、シャッソンを聞いたりゲームをしたりというわけで、強化合宿という固苦しいイメージとは反対にのびのびとフランス語を楽しむことができました。

その大きな背景に、セミナー・ハウスの豊かな自然もあると思います。都会にはない新鮮な空気や生い茂る緑の中になれば、自ずからのびやかな気持ちになります。そして不便ではあるけれど素朴なセミ

ナー・ハウスでの暮らしは人々の絆を強くします。私たちも初対面なのに、終わる頃には皆本当に仲良くなっていました。たくさん新しい友人ができたことも大変嬉しいことでした。同じ勉強をする友人というのは社会人になってからは特に嬉しいものです。参加して良かったと心から思っています。

西武コミュニティ・カレッジ「カウンセ

リングと心理療法師講座」参加者

都社会福祉協会介護相談員 出崎 征子

東京都下とは思えない静かな環境の中で、わずか二日半ではございましたが、これまでにないすばらしい研修を終えることが出来ました。これは偏に皆様のおかげであると感謝しております。

二日目の朝、四時半頃から一時間位か

けて小鳥達の声を聞いたり、咲いている草花に話しかけたりしながら散歩いたしました。どこも行きたいと整備されており、日常、皆様のご苦労の程が察せられました。また食堂で働いておいでの方が、盛りつけて下さる時にも下膳の時にも声をかけて下さることで、楽しい食事の一時を過ごすことができました。

このような環境で若い方々が研修なさることは何と幸せなことかと、つくづく感じました。大学には行くことも出来ず五十歳になりましたが、この年にして大変中身の濃い研修を終えることができました。これからの生活の中でこの経験を生かして参りたいと存じます。

(7月27日付書簡より抜粋)

わたしたちの合宿

心理学サマーセミナー

国際基督教大学心理学研究室

山中 淑江

ICU教育心理学研究室開設当時より開かれていたサマーセミナーは、数年の中断の後、一九七八年より再開されました。

このセミナーは研究室主催ですが、企画・運営は学生の手によってなされています。ファカルティ、院生のほぼ全員と学部生の希望者が参加し、約七十名が三泊四日の合宿を通して、通常の授業ではできない学習をし、また互いの親睦を図る、というものです。プログラムは、ファカルティと院生がそれぞれの分野で興味あるテーマを紹介し、七、八名のグループ学習をする分科会と、全員が共通のテーマを考える全体会とを大きな柱としています。レクリエーションやパーティー等も盛り込まれ、四日間は瞬間に過ぎていきます。

学習の方法は、じっくりと一冊の本に取り組むことから体験学習まで様々ですが、それぞれが自由に考え、発言することが尊重されています。心理学の勉強を始めていない一年生や他学科の学生からファカルティまでが、各々の立場で討論し、下級生は心理学的な物の見方や知識を、上級生は下級生の素朴な疑問に答えることで自分の理解の問い直しを、と



メンバー勢揃い——夏の日差しの下で(本館東側)

互いに得るものは大きいようです。プログラム以外の時間は、語り合ったり、課題をしたり、散歩を楽しんだり、思い思いに過ごします。合宿全体を通して、心理学を学ぶ基礎となる、人間や環境の観察力と認識力を養うのではないかと思っています。

この九年間で五回、特にここ四年間は連続で、八王子の大学セミナー・ハウスを利用して頂いています。それは、セミナーに適した施設であることだけでなく、セミナー・ハウスに息づく、設立にあたられた方々の思想と熱意にふれ、学問をすることへの誇りを感じる事ができるためでもあります。おそろく来年の夏も、第二のキャンパスといえるセミナー・ハウスを訪れることでしよう。

(博士後期課程2年)

利用状況

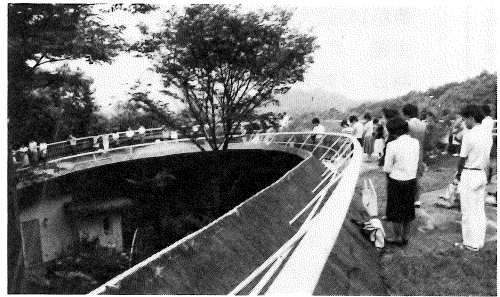
＊Ⅱ同月2回利用
＊Ⅲ同月3回利用
日帰りを除く

■6月(64グループ、延四、〇三七)

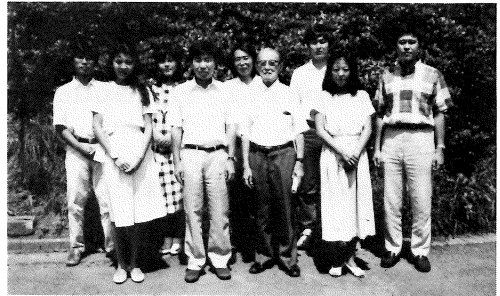
- 駒沢大学助教授* 谷敷 正光
東京都立大学建築工学科新入生オリエンテーション
早稲田大学講師 森 元孝
東京工業大学助教授 原科 幸彦
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション・セミナー*
電気通信大学学友会代議員会
青山学院大学助教授 徳重宏一郎
東京外国語大学助教授 宇佐美 滋
日本大学助教授 高橋 正郎
明治学院大学社会学科第二部フレッシュマン・キャンパス
東京薬科大学薬学部新入生ガイダンス*
中央大学経理研究所
中央大学昼間部経済学部ゼミナール連合会
豊島 聡
東京大学助教授 小林 保彦
青山学院大学助教授 竹内 啓一
早稲田大学建築学科新入生オリエンテーション
駒沢大学講師 大塚 秀治
東京都立大学助教授 森岡 清志
青山学院大学助教授 佐藤 和男
明治学院大学助教授 宮野 彬
東京農工大農業経済学研究室
東京外国語大学助教授 齋藤 重男
中央大学助教授 齋藤 優
明治学院大学助教授 田村 剛
東京医科大学保健所実習生グループ
東海大学助教授 師岡 孝次
お茶の水女子大学助教授 栗原 尚子
早稲田大学助教授 狩野 紀昭
東京理科大学助教授 大槻 健
お茶の水女子大学助教授 千葉 準一
お茶の水女子大学助教授 坂本 満
東京都立大学助教授 日向野幹也

■7月(93グループ、四、七八九)

- 東京松本英語専門学校 若槻 泰雄
玉川大学教授 帝京山梨看護専門学校
東京YMCA専門学校英語科 産業能率大学海外学生訪日研修団
日本女子大学附属高等学校 Chobi Chobi
第10回大学合同セミナー
大学天文連盟変光星分科会
第15回十大大学合同セミナー
日本建築学会
ルソール合奏団
新日本物流
小松ゼノア
酒井薬品
アイワールド
サンデーサン
日本分光工業
日本生産性本部
東芝プロセソフトウェア
ベスト外国語学校
ヒュースマンライフセンター
ヘキスト・ジャパン
富士電機
日水コン下水道本部
ヒューマン・サイエンス研究会
日本電気
千葉工業
中央大学助教授 栗山 盛彦
東京大学助教授 関口 定一
東京都立大学助教授 和田 英一
東京都立大学助教授 大村 芳正
国際基督教大学心理学夏季セミナー
一橋大学助教授 山本 武利
横浜国立大学教育学2年ゼミナール
慶応義塾大学助教授 榎谷 昭彦
お茶の水女子大学教育学部新入生セミナー
お茶の水女子大学理・家政学部新入生セミナー
東京理科大学助教授 沖塩莊一郎
東京外国語大学助教授 若林 俊輔
武蔵大学助教授 武内 清
杏林大学助教授 田久保忠衛
東京都立大学助教授 矢代 和夫



平和への祈り——8・6広島原爆記念日(教師館屋上)



7大学合同の「21世紀の心理学の会」
——中央は結城錦一・中京大学名誉教授



リコーダーの練習合宿——学習院大学音楽愛好会(遠来荘)

- 成蹊大学教授 下斗米伸夫
明星大学助教授 鈴木 二郎
東京大学社会学思想研究会
東京大学助手 荻野 弘之
中央大学講師 川原 榮峰
中央大学助教授 木下 徳明
東京大学助教授 平野 敏介
東京大学講師 見田 宗介
東京大学助教授 小和田 恒
中央大学助教授 中川洋一郎
東京理科大学助教授 狩野 紀昭
恵泉女子短期大学英文科総合科目「国際」セミナー
中央大学助教授 長谷川幸生
駒沢大学21世紀政治フォーラム 寺中 良二
明治大学助教授 市川 新
東京大学助教授 馬場 修一
明治学院大学助教授 児玉 里枝
慶応義塾大学ピリオオメトリックス 増田 茂樹
一橋大学助教授 油井大三郎
芝浦工業大建築学科八王子セミナー
早稲田大学コンツェルト

- 原 聡介
五味 健吉
入江 和生
土井 雅博
坂本 福子
菊地 進
久米あつみ
東京学芸大学教授
法政大学助教授
共立女子大学助教授
武蔵工業大学助教授
立教大学講師
東京女子大学助教授
中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
桜美林大学経済学部教授会
創価大学中国研究会
名城大学短期大学部助教授
松尾 秀雄
東電学園大学部夏季演習
東洋女子短期大学・東洋文化学院課
外英会話夏期講習
富士短期大学助教授
独協大学講師
東京外国語ビジネスアカデミー
専修大学助教授
学校教育における在日外国人の役割
協議会
第8回大学院共同セミナー
現代資本主義研究会
ビッグケンハイム氏を囲む会
日韓女性親善協会青年部

- 费尔ハーモニーオーケストラ
日本ワイルド協会
ヘルベスウィルス研究会
河合塾国際教育センター
婦人労働問題研究会
朝日カルチャーセンター
国際教育交流協会
文学教育研究者集団
富士ワコム制御
日本電気フィールドサービス
イセト紙工
バクスタートラベノール
ヒュースマンライフセンター
興亜火災
生活協同組合都民生協
NBCコンサルタンツ人材育成
酒井薬品*
三井物産
日電物流センター
ベルモント化粧品
多摩ゼロックス
東芝デザインセンター
日本生産性本部
西武百貨店袋袋コミュニティ・カレツジ
日本電気

●第142回大学共同セミナー

主題 神秘主義——西洋思想のもうひとつの正統
期日 1987年12月4日～6日(金～日)

◇ゲスト講演

ルネサンス美術にみる神秘主義——デューラーとミケランジェロに関する試論——
東京芸術大学音楽学部教授 若桑みどり氏

◇セクション演習

A. 「ヨーロッパ神秘思想」理解のおもしろさとおもしろさ
信州大学人文学部教授 南原 実氏

B. アメリカ文学と神秘主義
東京外国語大学外国語学部教授 志村正雄氏

C. イタリア・ルネサンスにおける神秘主義——フィレンツェ・プラトン主義者の「愛の理論」を手がかりに——
北海道大学文学部助手 伊藤博明氏

D. 神殿の建設——ある神秘主義的イメージとその変遷
神秘主義研究家 松本夏樹氏
(運営委員)
東京大学文学部教授 川端香男里氏

●第143回大学共同セミナー

主題 よくわかる家族のはなし
期日 1988年3月11日～13日(金～日)

◇ゲスト対談

犯罪の家族誌
劇作家 山崎 哲氏
劇作家 別役 実氏

◇セクション演習

A. 東京大学保健管理センター副所長
立教大学学生相談所カウンセラー
山田和夫氏
B. 法政大学経済学部助教授
平木典子氏
C. お茶の水女子大学家政学部助教授
山本真鳥氏
袖井孝子氏
(運営委員)
D. 東京経済大学経済学部助教授
桜井哲夫氏
(運営委員)

問い合わせ先=企画室☎0426-76-8532(直通)

『セミナー・ハウス』一九八七年一〇月二五号 発行 財団法人大学セミナー・ハウス 千一九二〇三 東京都八王子市下木 〇四二六七六八五一一 振替口座 東京五七四五九〇番/編集 大学セミナー・ハウス企画室/編集・発行人 川川秀孝/製作 中央公論事業出版

- (個人利用)
ストックホルム大学 Dag Noréns
夫妻
白梅学園短期大学 田中 未来
筑波大学講師 石田 東生
東京都立大学短期大学・同商科短期大学茶室部 木村 靖二
中央大学試研AIMING 新川 哲雄
立教大学助教授 大谷慎之介
学習院大学助教授 見田 宗介
法政大学助教授 武蔵工業大学文化団体連合会リーダーズキャンパ
立教大学助教授 敷田 礼二
文京女子短期大学助教授 小川 智由
青山学院大学助教授 東海 幹夫
東京理科大学助教授 大沢綱一郎
駒沢大学助教授 寺中 良二
東京学芸大学KITC

- 中央大学通信教育部 増田 実
明星大学通信教育部
武蔵大学講師
日本大学教職員組合
東京学芸大学生活協同組合
東京外国語大学助教授 高橋 正明
慶応義塾大学助教授 加藤 寛
東京理科大学第二部物理研究部 渡辺 教
東京都立大学助教授 コーターゼミ
学習院大音楽愛好会リコーターゼミ
東京学芸大学名誉教授 永野 賢
東京工業高等専門学校日豪学生交流実行委員会
東京理科大学人間関係ワークショップ プ・リユニオン
東京理科大学助教授 川端 潔
東京理科大学助教授 国分 康孝
独協大学助教授 林 俊一
静岡大学助教授 須藤 修
山梨大学法経短期大学部講師 中丸 宣明
東邦大学理学部教員養成課程
常磐大学人間科学部教職課程
東京神学大学夜間講座夏期研修会
前橋市立工業短大助教授
神奈川大学助教授 J・ボチャラリ
玉川大学助教授 田中 宏
東京工科大学専攻部経営職研修
神奈川大学助教授 深澤 俊昭
横浜市立大学医学部神経学習会
神奈川県立百合丘高等学校生徒相談合宿研修
児童福祉法研究会
桜美科大学国際部CJBS P
全国学生ME研究会
軽イオン研究会
21世紀の心理学の会
哲学研究会
現代史研究会
仙川バプテスト教会
日本作業療法士協会
八王子保育研究会
文学教育研究者集団
東京リコーダー協会
朝日カルチャーセンター
子どもとつくる生活文化研究会
多摩ニュータウンキリスト教会
子どものつまずきを研究する会
学校協同組合共学舎
恵みバプテスト教会
柿の木坂教会青年会
英語教育協議会
津田沼教会
小石川白山教会
「石川の鳴る音」読書会
アストック
モラロジ 調布青年部
東京都高等学校英語教育研究会
練馬神の教会青年会
漢法史徳塾
早稲田無教会集会
日本レッドケン

- コア
エイデル研究所
ヒューマンライフセンター
中野輸送
積水化学工業
多摩中央信用金庫
国際交流サービス協会
日本生産性本部
小西六写真工業
富士電機労働組合東京支部
生活クラブ生協職員同期会
アトリエY O Y O
ベルコム
(個人利用)
神奈川大学助教授 深澤 俊昭
白梅学園短期大学学長 田中 未来
上越市立城東中学校教諭 山岸 保一
富士ゼロックス 巖岩ナオミ
U研究室 田村加ツ三

●編集後記

本号は6/8月の活動を掲載しましたが、新入生オリエンテーション合宿の実施状況については、4月から7月までをまとめて13頁に一欄でお目にかけます。この3ヵ月で総計六六件(三三校)一〇、三一六人という数字は、77年の三二件(二七校)四、七〇七人の二倍強ですから、この一〇年間の高等教育の中で、見落とすにはならぬ動向の一つであるといえましょう。
表紙の写真は、ICU教育心理学研究室主催の心理サマセセミナーの演習風景です。ハウスを「第二のキャンパス」と称される同研究室の合宿にかける心意気を「わたしたちの合宿」(14頁)で綴っていただきました。(能)